

巻頭●対談

歴史を縦系に世界を横系に、日本の林業を読み解く

森林総合研究所にて
Photo by Godo Keiko

熊崎 実 筑波大学名誉教授 × 堀 靖人 研究コーディネーター

各国の林業を調査してきた経験とドイツ林業史との比較から日本林業への新しい視点を投げかけつづける熊崎実さんと、熊崎さんの古巣でもある森林総研林業経営・政策研究を担う堀靖人さんに世界の林業史からみた日本林業の現状についてお話し頂きました。

堀●熊崎さんは、ドイツ林業との比較から日本の林業への提言をつづけてこられました。そこにある歴史への「想い」や「眼差し」についてお聞かせ頂けますか？

熊崎●最初は、歴史をやるつもりはなかったんですよ。林業試験場に入った頃は、ドイツの専門書をひたすら読めといわれて、そのうち同時代のドイツの林業雑誌を読むのが楽しくなりました。当時のドイツ林業は、アメリカ南部で成功した短伐期の育成林業を受けて、短伐期に転換するか長伐期を維持するかの論議がなされていた時代なわけ。日本も似た状況になると考えていたから、海外の動向から日本をみる視点がそのとき身についたのかな。

堀●1998年にコンラッド・タットマンの『日本人はどのように森をつくってきたのか』（以下原題…『緑の列島』築地書館）を翻訳されましたね。海外の歴史家が捉えた日本の林業史は、とても新鮮でした。

熊崎●もちろん日本人が書いた林業の通史は、いくつかあります。徳川家の一次資料があるし、歴史学者の鳥羽正雄や所三男が通史を書いている*。だけど、残念なことに日本しかみてないんです。タットマンの『緑の列島』は、世界の大きな流れの中で、日本の林業をみてるんだよね。日本の文献を300ぐらい丁寧に読み込んだ上で書いていて、世界的にも評価された。それまでは、林業の先進国はドイツが中心と考えられていたけれど、同時に日本でも保続的な林業をやっていたというところを世界に紹介した本だったわけです。

堀●客観的に評価されたことは、日本人とし

『日本人はどのように森をつくってきたのか』
(コンラッド・タットマン著 熊崎実訳 築地書館)

『木材と文明 ヨーロッパは木材の文明だった。』
(ヨアヒム・ラートカウ著 山縣光晶訳 同)



て素直に誇らしく、うれしかったですね。

熊崎●世界からみた日本林業の印象は、あの本でガラッと変わったと思う。最初にタットマンを読んだのは『近代日本林業の源流 秋田藩の場合』(未訳)という本です。人びとは、子々孫々まで秋田藩という小さな空間の中で暮らさざるをえない。徳川の封建時代で、外へでられないわけだから、森をしつかり守り続けなければならないことがよくわかっていった。当時は森林が荒廃してただけで、それを藩も商人も百姓たちも、みんな協力していい山を作っていくと立ち上がって、秋田の森林は回復していく。すぐく立派になっていくわけ。タットマンの原点はそこにあるんだよ。昔のドイツとよく似てるっていうんだな。ドイツでも、それぞれの地域で伝統的な林業経営が成立することで近代化する。

堀●ヨアヒム・ラートカウの『木材と文明』(山縣光晶訳 築地書館)の日本について書かれた章でも、タットマンを下敷きにしつつ、ヨーロッパ以外で伝統林業に到達した唯一の国が日本だと書かれていますね。国内では「徳川林政史研究所*」を除けば、そうした視点の林業史は、それほど多くないように思います。

熊崎●ラートカウは、予断を持って論を立てることのないすぐれた歴史家です。僕はもっとも注目して読み続けています。

日本についていうと徳川幕府のあと、明治政府はとも中央集権的なやり方で、林業をやりはじめるわけだ。その時、ドイツで林学を学んで帰ってきた学者が指導的な役割を果たすのだけれど、僕は二つの流れがあったと

思うんだよね。一つは中央で官僚として指導した人たちで、森林総研の前身の試験場や山林学校を創った松野磯や、木材の防腐技術を確立した志賀泰山らの流れ。もうひとつが、造林造園技術に力を注いだ本多静六や、吉野の林業家・土倉庄三郎ら民間の力で政治を動かそうとした中村弥六らの流れ。

堀●なるほど。日本はドイツ林業を西欧の最新学問として学んだわけですが、そこにも2つの流れがあった。さらに秋田藩のような日本独自の源流もあったということですね。

『森林の江戸学』(徳川林政史研究所編 東京堂出版)などを読むと、森林法の草案づくりのときに、江戸時代の施政が参考にされたりしている。筑波大学の加藤衛弘さんも指摘していますが、1999年からの営林局・営林署の統廃合による組織再編で、江戸時代から脈々と保存されてきた古い史料が散逸しかねない状況だった。それはまさに国家的な損失だと。そんな古い史料を何に使っていたかという、秋田営林局などでは、江戸時代の森林管理の仕方を職員が時折みて、しつかり参考にしていったというんです。

熊崎●へー、そんなことがあったの？

堀●ええ。日本はドイツ林学の移人ですが、それぞれの地域では江戸時代の森林管理をそのまま継続していたところもあったんじゃないかと。組織改編で散逸のおそれがあった史料は、最終的に公文書館で保存されることになりましたが、江戸時代の林業はそれなりに水準が高かったのでしょうか。

熊崎●ドイツの森林学者カール・ハーゼルの

*Key Words 徳川林政史研究所

尾張徳川家の第19代当主で政治家、植物学者であった徳川義親(1886-1976)が、尾張藩の領地・木曾の林政に関する調査・研究・資料収集を目的として設立した研究所。



*Key Words 鳥羽正雄、所三男の林業史

鳥羽正雄(1899-1979)は林業史学者、城郭研究家で『日本の林業』(雄山閣 1948)や『日本林業史』(同 1951)を著した。所三男(1900-1989)は林業・林政史学者で徳川林政史研究所所長を務め、『近世林業史の研究』(吉川弘文館 1980)を著した。



熊崎 実 (くまざき みのる)

1935年岐阜県生れ。農林省林業試験場(現・森林総合研究所)林業経営部長、筑波大学農林学系教授、岐阜県立森林文化アカデミー初代学長を歴任。現在は、筑波大学名誉教授、日本木質ベレット協会顧問、一般社団法人日本木質バイオマスエネルギー協会顧問。専門は国際森林資源論、農学博士。著書・訳書多数(欄外参照)。



「さまざまな職務から開放され、悠々自適の生活が始まる矢先の80歳の年に出会ったのが、J・ラートカウの著作でした。そして、ふたたび学究生活に戻るになりました。体力温存で、いまでも好きなテニスだけは続けています。」

巻頭●対談

山の管理は長い年月がかかる。だから昔の人が、その森林をどう扱ってきたかわかっていないと……

本にもおなじようなことが書いてあったな。昔の営林署が残していた記録を人や組織が新しくなると捨てちゃったっていうんだ。

堀 ●もったいない！ 明治政府は江戸幕府を否定して始まったけれど、ドイツは……。

熊崎 ●営林署長が交替して、歴史に熱心な人ならいいんだけど、歴史に関心のない人だとだめなんだな。

堀 ●やはり林業は、木と関わる時間が長いから、歴史がとても大事ですよ。

熊崎 ●山の管理は長い年月がかかる。だから昔の人が、その森林をどう扱ってきたかわかっていないと、ちゃんとした作業ができない。作業の記録がとても重要な資料なわけ。

堀 ●ドイツの林業史は山が中心で、川下の木材産業があまりでできません。ラートカウも書いてますが、少し前のドイツの林業は、山から木材産業までの流通が障害物競走みたいだったって。

熊崎 ●日本もドイツも、流通経路がとても複雑だったと思うんだよね。規格がきちんと統一されてなくて。材木なんて伐ってみないとわからないから、信頼関係がないと成り立たない。こういう育ちをしているかもわからない。素人が買えるわけじゃないんです。その点、北欧やアメリカは早くから規格をつくって、流通経路が合理化されていった。ドイツは製材業がうまくいって合理化へ舵を切って林業をリードするようになったけれど、日本では林産業が外国から材木を輸入し、国内の林業がおろそかになっちゃった。

堀 ●最近少し変わりはじめてますけどね。

ところで、熊崎さんは著書の『林業経営読本』(日本林業調査会)に長伐期施業*ということを書いてたと思います。わたしも長伐期林業は、生態系にも調和していると思うのですが、反面、熊崎さんはアメリカの早生樹で、木材を断片化して合板などのような使い方をすることに言及されています。

熊崎 ●アメリカでも、南部のマツ地帯のように短伐期の施業ができるのは一部だけなんです。南部マツだから育種も、遺伝子組換えも効率的にいくけれど、それがほかでもうまくいくかといったら、北のほうでは成長が遅すぎてうまくいかない。そこで、ある程度伐期を長くして、できるだけ人手をかけずに自然の力でやろうとしている。収穫量は多少落ちるけれど、むしろいまは、そっちの方へ力を入れてるんじゃないかな。

堀 ●では、日本の長伐期林業というのは、方向性としては正しい？ あんまりバンバン伐るのは良くないですよ。

熊崎 ●うーん、正しいっていうかねえ、それよりしょうがないと思うんだよねえ。バンバン伐ったりしたら、大変なことになる。日本の林業は、その経験をたくさんやってきて。バンバン伐って大水が出て、土砂崩れが起きて。その繰り返しだから。

堀 ●でも、30年もたつと忘れてる人もいっぱいいるようです。「どんどん行け！」みたいな感じで。歴史を振り返ることがすごく大事だと思うのだけれど。

熊崎 ●歳をとつてくると、だんだんわかってくるんだけどね(笑)。



熊崎実の本

『森林未来会議』
(熊崎実、速見亨、石崎涼子編著 築地書館)
『木のルネサンス』
(熊崎実著 エネルギーフォーラム)

* Key Words 長伐期、短伐期

日本では、植林してから40～50年で伐採するのが標準的な伐期とされている。それよりも長い期間育て、80～100年の樹齢で伐採することを長伐期、ぎやくにもっと若い樹齢で伐採することを短伐期という。

堀 靖人 (ほり やすと)

1960年鹿児島県生まれ。1984年、農林水産省林業試験場(現・森林総合研究所)経営部に採用。林業経営・政策研究領域林業動向解析研究室長、同領域長を経て、研究コーディネーター(地域イノベーション推進担当)。農学博士。林業経済学会会長。著書に『山村の保続と森林・林業』(九州大学出版会)など。



「森林とそれを支える仕組みや制度づくりには長い時間が必要で、歴史を振り返ることの重要性とその面白みを再認識しています。現在の有り様が過去とつながっていることがわかるのは楽しいですね。」



巻頭●対談

地域に住んで林業や農業に携わりつつ、サラリーマンをしたりとか。そういう生き方も楽しい……

堀 ●間伐期には小径材が結構あまって「どうする？」という話になり、それがだんだん太くなってくると、こんどは柱にいちばんいい太さより太くなった中目材を「需要がないけどどうする？」みたいな話になったけれど、結局供給すると製材業がちゃんと機械を開発してうまくやってくれました。いま、大径材が売れなくて困るという話で、仕方ないから中国に輸出しちゃえみたいなこともいわれるんですが、大径材も出てくれば、それなりにうまく使おうと思うんです*。

これから20年くらいかけて大きな機械が入れるように、いろいろ整備した方がいいんじゃないかと思うんですけどね。

熊崎 ●これからだと思うんだよね。いままで路網整備は、大きい機械じゃなくて小型のばかりでやってた。造林作業の一環として作業路をつくても、長期的に維持管理できず、いつの間にかなくなっちゃうということも昔はよくあった(笑)。20年前に岐阜県の森林文化アカデミーで学生たちと一緒に現場に行ってみると、それまでにつくった作業路がみあたらない、なんてことがいくらかもあった。

堀 ●林道だったら、台帳管理されるんですけどね。

熊崎 ●林道のようにネットワークになってないと意味がないんだわ。

だからね、林業政策を研究するなら、まず山へ行つてどの政策が、どのくらいまで浸透しているかを調べたい。そうすれば、政策の違いがみえてくる。現場で検証することがだいじなんだよね。それを怠ると、問題

を解決する糸口がつかめないんだよ。原因がわかれば、解決の糸口が出てくる。

堀 ●成功している具体例とかは？

熊崎 ●今世紀に入る頃までは、自分たちでなんとか維持してる林業家はいたんだよ。けど自分の創意を発揮しづらくなって、そのうち、だんだん木材価格が下がり、海外との競争も激しくなった。それで、つぶれていったところもある。林業家が自分の創意工夫で経営維持できるような支援をしないとイケなかった。

ドイツの場合だと、イニシアティブは民間がとつて、役所は支援するだけというスタンズ。いくつかの国では国有林を解体して、民営化したところもある。日本は、そうした切り替えができなかったのだと思う。

これからは、地方の人たちが自分たちの森林をどうするか、資源をどう活用するかを考えて、リードする時代になると思う。

堀 ●小さな林業とか、自伐林業もありますね。

熊崎 ●自分の労働力だけでやろうとすると、使える機械が限られちゃうから、労働者として得られる賃金も低くなる。大型の林道を整えて、共同でやるような仕組みにしたほうが生産力や収入は上がると思うんだよね。

堀 ●生産する場を集約化するのは、意外と合意形成にお金と時間がかかると思うんです。なので分散的に伐採して、出てきた丸太をまとめて売る方に力を入れるといいんじゃないかと思います。ドイツも皆伐面積に制限がありますよね。現場でも択伐でやっていることが多いように思います。シュバルツバルトの林

堀コーディネーターの本



『山村の保続と森林・林業』
(堀靖人著 九州大学出版会)

*Key Words 小径材、中目材、大径材

日本では丸太の利用は柱材を基本にしてきた。柱材をとるのに適した末口直径(細い側の直径)が14cm以上20cm未満の丸太を柱適寸材と呼ぶ。それより細いものを小径材、20cm以上30cm未満までの丸太を中目材、30cm以上の丸太を大径材もしくは尺上丸太と呼んでいる。



シュバルツバルト

ドイツ南西部のバーデン・ヴュルテンベルク州にある南北160km、東西の最大幅50kmの森林と放牧地からなる山地で、その最高峰は標高1,493mのフェルトベルクである。もともとは落葉広葉樹とモミの混交林に被われていた。19世紀半ばには森林の荒廃が進み、その後、トウヒの植林が進められた。20世紀後半に酸性雨被害や度重なる風害にみまわれたことから、トウヒの一斉林を元来の自然植生に戻そうとする動きがある。近年、観光地としても重要な地域となっている。

業は、林農家の自家労働力の割合が8割以上なんです。素朴なやり方でも、自分で丸太まで出して、その丸太の販売から共同化する。組合などの仕組みを考えると。

熊崎●それはあると思うな。ドイツは、農業用のトラクターが大きいんだよ。日本のトラクターは小っちゃくて、太い丸太なんて引っ張り出せない。ドイツの農業用の大型トラクターはすごいと思うよ。もともと、あれは平らな所だからできるんだけど。

堀●いいですね、ドイツのトラクター。効率的で、うまくコストを抑えています。

熊崎●日本の場合は集約化のためにものすごく努力してるんだけど……ドイツは、もう少し自由かな。儲かれば一緒にやるけど儲からなかったらやめる。国や州の政策に頼らず自らの創意工夫を信じたやり方。

堀●自らの創意工夫だと、やる気ができますよね。

熊崎●その時々の方針の効果については、歴史を見返して、なんでも検討し直すことが大事だと思っています。これから、林業を勉強する人は、ぜひラートカウを読んで、世界の流れや歴史をもっと勉強して欲しいなあ。

僕はいま、ある意味チャンスだと思ってるんです。これから環境税であるとか、いろんなお金が地方自治体に入ってくる。それを上手に利用して、どうしたら自分たちでやっていけるか考える時期だと思っんです。

堀●コロナ禍の影響で「都会に住まなくてもいいかも」という発想は広がるように思います。地域に住んで林業や農業に携わりつつ、

サラリーマンをしたりとか。そういう生き方も楽しいような気がするんですけどね。

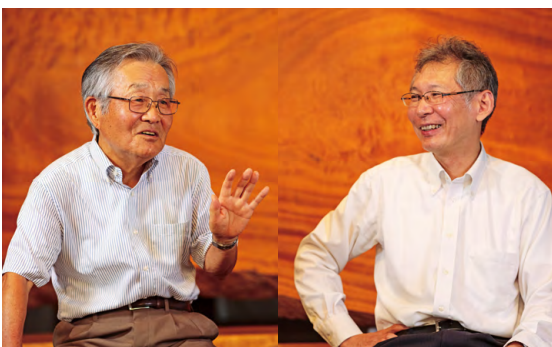
熊崎●中国とかすごいよね。山奥までIT化を推進してるんだよ。するとね、情報も機械も簡単に森にアクセスできるようになるわけでしょう。林業も大きく変わっていくと思うんだよね。山村の山奥で傾斜が急で不便でも、ドローンで植林もできるかもしれない。

堀●若いころ、アルビン・トフラー*の『第三の波』という本がベストセラーになって、一斉に同じ時間に出勤して、同じ時間に働いておなじものを大量生産するという、そういう時代が完全に終わって、みんな遠くでリモートワークができる時代がくると書いてあったんです。でも実際は人間は組織に属してみんな仕事するのが好きだったから、なかなかそうはならなかったんですけど、ここに来て、少し変わるかなと。都市に集中した人口がもういちど地域に分散して、そこで食料や素材を供給する農林業が新たに見直されていい感じになれるんじゃないかと期待しています。

熊崎さんはよく僕ら後輩に「日本を研究するのは当たり前。海外のことも必ずどこか好きな国をみつけて研究しろ」とおっしゃっていた。その教えは、身に沁みています。

熊崎●ほかの国をみないとうしても視野が狭くなるんだな。歴史を縦系に、世界を横系にして織りなしたところに、みえてくる景色があると思っていまもやってます。

堀●熊崎さんの研究姿勢を、僕もぜひ若い研究者に継承していきたいものです。



*Key Words アルビン・トフラー(1928-2016)

アメリカの未来学者。1980年に出版した『第三の波』(日本放送出版協会、中公文庫)が、農業革命、産業革命につづく第三の波=情報革命による脱産業化の社会を予見して、ベストセラーとなった。